

「人権の階段」

千葉県 船橋市立三田中学校 2年

三富 詩花（みとみ うたか）

「コツ、コツ、コツ」街で白杖をつくこの音を聞くたびに、私はつい振り返ってしまう。そして大好きな「杖のオジさん」の事を思い出すのだ。私は思わず「大丈夫かな？困っていないかな。」そう心の中でつぶやいては、その方をただただじっと見守る。そして、無事見送ると安心して歩き出すのだ。

私の親戚に強度の弱視で白杖をついているオジさんがいる。祖母の兄にあたるオジさんは、生まれつき強度の弱視があるにもかかわらず、もう片方の目を不運な事故で失ってしまった。私が物心ついた頃には、オジさんが杖をついて外出するのも、小さな私にはごくごく当たり前の風景だった。目が見えなくて大変なはずなのに、そんな素振りを少しも見せず、いつも明るくて優しいオジさんが私は大好きだった。それどころか、幼い私にはオジさんがヒーローのように思えてなかったのだ。なぜかという、オジさんは複雑に並べられた点だけで文字を読んでしまうし、親戚が集まればみんなにマッサージやお灸をやって、まるで体の中が心の目で見えているかのように、悪い所もピタリと当ててしまう。それに、声や足音だけで誰がいるかを見分けられるし、私の声のトーンを聞くだけで、「何かあったか？」そう気遣いもしてくれる。オジさんは、たとえ目が見えなくても、その数十倍も、数百倍もいろんな事が出来るすごい方だと思っていたのだ。

月日がたち、私は去年親戚のお葬式で久々にオジさんに会うことになった。「コツ、コツ、コツ」懐かしい白杖の音と、「詩花ちゃん！」と明るく呼んでくれる優しい声。振り返るとそこには、少しシワが多くなった笑顔と、腰を痛そうに丸めてゆっくりと近づいてくるオジさんの姿があった。「大丈夫？」何人もの親戚がオジさんに手を差し伸べた。そして、「段差があるよ。」「椅子に腰かけて。」と声をかけ、人々はオジさんを囲んだ。その時に普段明るいオジさんの表情が少しだけ曇ったように思えた。人一倍周りに気を使うオジさんだから、お葬式の席でみんなの目が自分に集中してしまった事に、恐縮してしまったのだろう。オジさんはみんなが集まっている部屋を出て、廊下の目立たない隅の方の椅子にポツンと座った。私がすぐ隣に座るとオジさんは少しびっくりして、声を聞いて少しほっとした顔になった。そして、「みんなに悪いな。」とため息をついた。「会社関係の方々もいてまずいから、これはしまおうか。」とそっと白杖をカバンの中にしまった。オジさんが自分の障害の事を隠し、気まずそうな姿を見た時、私の心の中に黒いモヤがかかり、前が見えなくなっていくような衝動を受けた。周

りは優しさゆえの行動だから何も悪くない。ましてやオジさんは何も悪いことはしていない。でも、オジさんが一歩下がらなければいけない状況を見ているうちに、私の中に強い風が吹いてきてそのモヤを追い払おうとした。「私がオジさんの杖になろう！」そう思うと一筋の光が見えてきたように感じた。

気を使うオジさんだから、過剰に気を使った話などせずに、そばにいて普通の話しながらオジさんの手を支えた。少しだけ難しかったけど、いつも通りにする事、周りの人となんら変わらない接し方をする事、それがオジさんの居心地の良い場所なんじゃないかと私には思えたのだ。「詩花ちゃんがいるから大丈夫ね。」周りの親戚が私に任せてくれた時、私は嬉しかった。オジさんが周囲に気を使い、一步一步と下がっていくその心に寄り添う事ができたのだ。オジさんがいつもの笑顔になってきた時、私はオジさんのもう一つの目になれた気がした。

その時まで私は障害がある人がいると、自分が手となり足となり、身の回りの事を全て手助けする事が良い事だと思っていた。それを望む人もいるだろう。でも、オジさんのように、そうすることで、その人の居心地が悪くなってしまうのだとしたら、今までの考え方を反省しなければならない。なぜなら、それは障害者より一段上に上がって上から見下ろしていたようなものだったからである。

人の感じ方や捉え方は、その人によって違う。その人のニーズを間違えると、それはとたんに人権差別につながるかもしれない。私は今回の件で最初は杖をしまったオジさんが可哀そうと思っていた。しかし、後から考えると、実はオジさんがしてくれた気づかいを、周囲の人が無にせずに受け入れた素晴らしい瞬間だったのではないかと考える。それこそが、障害者が平等に社会で生活していけるために、目指すべき姿なのではないか。障害者が、障害の事で、人権の階段を一歩下がってしまうのは悲しい。そうならないよう、周囲がその人の気持ちに寄り添い、一緒に階段を上がいけるような社会を作りたい。そのために、私はその人、一人一人の気持ちを何よりも大事にしてゆきたいと思う。今日も、オジさんが笑顔で一歩を踏み出せるように。